詩詠い物語

斬龍黒牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
詩詠い物語

【Ｎコード】
Ｎ６５９７Ｓ

【作者名】
斬龍黒牙

【あらすじ】
これは斬龍黒牙のみた夢。
それは、ほんの一時の夢物語。

プロローグ

ある古本屋に少年少女がいた。
「ねぇ、黒龍！」
少女は少年…黒龍を呼んだ。
「なんだ、風華？」
「これ見てみて！」
少女は一冊の本を少年に見せる。
その本のタイトルは、
『詩物語』

昔、ある国に一人の詩詠いが現れました。
詩詠いはその国の王も民も殺し、魔物に変えて近隣の国々を侵略していきました。
一つまた一つと国が魔物と詩詠いに滅ぼされていきました。
そしてこの国も……
「皆の者！けしてあの化け物達を中に入れるな！」
『「おおぉぉ～～」』
「隊長！王より伝令！」
「なんだ…」
「けして死ぬな…。です。」
「……わかっているよ。クロノ…」

第一章『詩詠い』

詩詠い、それは言葉に力を与え、詩で規則を生み出し操る者達のことを意味している。
そして、ここにも二人の詩詠いがいた。
ーとある森の中ー
「なぁ、本当にここらなのか？」
少年は少女に聞いた。
「うん。確かにここらへんのはずだけど……」
少女は周りを見回しながら応えた。
「これ以上歩くのは、しんどいのだが…」
「同感。」
二人は周りを見ながら、そんなやりとりをしていると、複数の兵士達が現れた。
「お前等は、何者だ！」
一人のリーダー格の男が詰問してきた。
「我らは詩詠いだ…、ある国に聖王と言われるお方にお会いしたくて、ここまで来た…」
一人がそう応えると、男は考えてから、部下に一言二言言うと、部下は大急ぎでどこかへと走り去った。
数十分後
部下が戻り一言二言言うと、男はこちらを向き、
「我等が王、聖王クロノウェル・ラズバート殿下がお会いしたいそうだ。」
て言うと、二人の詩詠いを馬に乗せて、国へと向かった。

第二章『聖王』

聖王、それは聖なる神々の恩恵を受けた王のこと。
しかし聖王になれる者は万に一人の確率なのだが、このフラムベルク国はできてから今まで聖王がずっと続いている。
ーフラムベルク国ー
二人の詩詠いは馬で走って約３０分で国に着いた。
そして、さらに数分たつと、二人の目の前に城が見えた。
フラムベルク国の国王が住む、セブンス・ラルバルト城が……

「よく来てくれた、歓迎するよ。古き時より生きし詩詠いよ。」
聖王クロノウェル・ラズバートは二人に歓迎の言葉を述べた。
「ちょっと、私達はまだ十代ですよ～。」
少女はおどけて言った。
「おや、おかしいですね…私からみたらあなた達は、長く生きているように見えるのですが？」
聖王は不思議そうに二人を見ると、少年はため息をついた。
「すまない。聖王殿の言うとおりです。我らは呪いによって、かなり長い間仲間達と生きている。」
「なるほど…それで、君達は呪いを解くために来たんだね。」
「それが、違うんだよね～」
少女の言葉に聖王は驚いた。
「では…いったい何のために……」
聖王の言葉に少年が応えた。

第三章『呪われし詩詠い』

あるところ、４人の少年少女がいました。
４人はとても仲が良く、いつもいっしょに遊んでいました。
そんなある日、一人の少女が、
「幽霊がでると有名なお城に行ってみよう！」
と言いました。
その言葉により、４人はお城に行き宝探しを始めました。
４人はどんどん奥へ奥へと行きました。
そして４人の前にはとても大きな箱が置いてある部屋に全員入り、箱を開けました。
すると、中から黒い霧がたくさん出てくると、その霧は何かから逃げるかのように、逃げ去ってしまいました。
４人は驚いて、城を出て村に戻りました。
４人は城であったことを大人達に隠して、「また遊ぼ！」と言って、家々に帰りました。
その日の夜、この村は野党達に襲われ、村の人達はほとんど亡くなり、生き残ったのはわずか４人でした。
しかし、４人共死ぬような死傷を負いました。
一人は首が飛び、また一人は心臓を槍で貫かれ、また一人は全身黒く焼け焦げ、また一人は全身ズタズタに切り裂かれていました。
しかし、４人共生きていました。
全員痛みに耐えて、身を寄せ合い過ごしました。
そして数ヶ月が過ぎた頃、全員は死傷が無くなりました。
４人共不思議に思い、ある都市に行きました。そこで不思議な占い師のおばあさんに出会いました。４人は事情を話し、どうすれば良いのかを聞きました。
「その箱は、俗に言うパンドラの箱だね…。たぶんその箱の中身を回収しないと、絶対にその不老不死の呪いは解けないね。あと中身

はたぶん悪魔の魂だね。数は全部で百八つ。それらを倒したとき、呪いは解けるね。」
そう言うと、４人は悪魔と戦うために色々なことをしました。
そして、現在に至る……

聖王は少年の言葉に嘘はないか探したが、それが真実と悟ると二人に言った。
「わかった。君達の要求は悪魔を探して欲しいだね。」
「あぁ」
「いいよ。ただし私の要求をのんで貰えれば…」
聖王が言うと少年は問いました。
「どんなだ？」
「我が国に邪悪な詩詠いとその魔物達が、襲ってきている。それらをどうにかしてほしい。」
「わかった。条件をのもう。」
少年が言うと、聖王は感謝の意を表すと、途中から寝ていた少女を起こして戦場へと向かった。

第四章『戦い』

二人は聖王の兵士たちと共に戦場に行くと、そこにはおびただしいほどの、リビング・デッドがいた。
「隊長！王よりこの者達と共に戦争を早く終わらして欲しい。とのことです。」
一人の兵士が言うと、甲冑を身に纏った一人が「わかった」と言った。
「すまないが、このままで話さして貰う。まず、作戦だが……」
「いい…我等が倒す。」
少年は隊長の話を割り込む、そう告げた。
「なっ、しかし我等がやらねば民に示しがつかない！」
隊長は少し怒りながら言うと、少女が応えた。
「じゃあ、隊長さん達は、ここであいつらを止めて置いて、私達は本陣を潰してくるから！」
「……わかった。」
隊長はしぶしぶ納得すると、兵士たちを集め戦い出た。
「さてと、私達も行こっか。」
少女が言うと、少年は首を横振った。
「我だけで良い。」
「でも…」
「忘れたか？我が本気を出すと、お主まで巻き込む。」
「わかってるけど…。ていうか、もう戻しても良いんじゃないかな？口調。」
「そうか……。それでは遠慮無く。風華、君は彼らを守ってあげて。」
「わかった。黒龍も気をつけてね！」
「わかってるよ。」
そう言うと、少年…黒龍は詩を詠い、敵の本陣に乗り込んだ。

第五章『終幕の鐘を鳴らす者達』

黒龍は辺りを見回すと、一人の老人が驚いていた。
「貴様何者だ！」
「死神…汝の命、貰いうける！」
黒龍は黒い剣を何処からともなくだすと、切りかかりに行く。
「なめるな若造が！」
老人が叫ぶと、リビング・デッドが動き、老人を守った…ように見えた。
斬撃は消えて、老人は切り裂かれていた。
「あっけない…」
黒龍はそう思い、戻ろうとしたとき…急に詩が聞こえた。
さっき死んだと思っていた老人はこちらを濁った瞳で見ながら詩を詠う。
（まずい！）
黒龍がそう思うと、素早く簡単な詩を詠う。
黒龍の詩が完成すると同時に老人の詩も完成した。
「エクス・グラビス！」
「シャドウ・ヴィジョン！」
老人の詩により黒龍は一瞬にして、潰された。
「たわいもないの～」
老人はそう言うと、黒龍の死体を探し始めた、ほどなくして死体を見つけた。老人をリビング・デッドの詩を詠おうとしたとき…
斬！
斬！
斬！
「なっ！！」
いきなりの斬撃に老人は切り裂かれた。
「やはりか。」

黒龍の死体はムクリと起きると、老人を見た。
「な……ぜ……生きて…」
「我は不老不死だからだ……」
黒龍はそう言うと、詩を詠い、老人のアストラル体を切り裂いた。
老人が死ぬと同時に戦場のリビング・デッドも死に、戦争は終結した。

エピローグ

戦争は終わり、二人は聖王に悪魔の居場所を教えて貰い。また旅にでました。

「だって……。」
「ふむ。で、何故泣きそうな顔で我を見る。」
「だって、私の活躍が掛かれて無いんだもん！」
風華がそう言うと、黒龍はため息をついた。
「それにしても…あれより、数百年か……」
黒龍はしみじみしている。
「そうだよね。色々あったけど、あと七体だし、頑張ろうね！黒龍。」
「あぁ。」
黒龍は頷いた。
「黒龍～！風華～！早く来いよ～！」
「先にお城で待ってますね～～。」
二人の少年少女がそう言うと、城へと歩んでいた。
「あいつら……」
黒龍はため息をついて、風華ともに城へと歩いて行った。

エピローグ（後書き）

これにて、詩詠いの物語を終了いたします。

最後まで読んでくださった方。

ありがとうございました。

また、別の物語を描き出しますので、良ければ、私が出す物語を読んで下さい。

ちなみに、この物語を気に入って下さる方が多ければ、リメイクして、最初の頃から彼等の呪いが解けたあとまで書くつもりです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6597s/

詩詠い物語

2011年10月9日00時27分発行